

[原著論文]

# 新カリキュラムソーシャルワーク実習Ⅰ終了後における 学生が感じた変化と自己評価の関連 — 高齢者福祉分野を経験した A 大学学生の自己評価から —

黒木 真吾<sup>1,\*</sup>・田島 望<sup>1,\*</sup>・竹下 徹<sup>2,\*</sup>・牛島 豊広<sup>2,\*</sup>

## 【要旨】

2021年より新カリキュラムのソーシャルワーク実習が始まった。1 回目の実習で得られた結果からは実習種別による分析の必要性が出てきた。そこで、A 大学におけるソーシャルワーク実習における調査の分析を実施した。今回の対象者は A 大学における高齢者福祉分野での実習を経験してきた学生12名である。12名の自己評価（4 件法）と学生自身が実習を通して感じた変化（自由記述）をもとに分析した。自己評価については符号検定で分析したところ高齢者福祉分野では達成目標25項目のうち22項目は実習前より実習後の方が「実践できる」と答えた者が増えた結果が導かれた。そのことから新カリキュラムの実習においては「地域」に関する学びを得る機会が多く、自己評価につながっているということ、さらにはソーシャルワーク業務に対する学びを得ていることが窺える結果となった。さらに、実習を通して感じた変化については、KJ 法でカテゴリ化したところ、11が挙がってきた。最終的な結論として事前学習の大切さに対する気づきを得ることにつながっていることから、本調査結果を今後のソーシャルワーク実習Ⅱへ活用する必要性もみえてきた。今後は、高齢者分野の学びの蓄積や事前学習内容についての分析、他分野の実習での状況も併せてみていく必要がある。

**キーワード：ソーシャルワーク実習、高齢者福祉、社会福祉士養成、実習教育、新カリキュラム**

## I. 緒言

2021（令和3）年度より社会福祉士養成は新カリキュラムによる教育が始まり、ソーシャルワーク実習においてこれまで以上にソーシャルワーク機能を発揮できる実践能力を習得できる内容が反映された。また、一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟（以下、ソ教連）は、ソーシャルワーク実習教育内容・実習評価ガイドライン（以下、教育内容・評価ガイドライン）を更新<sup>1)</sup>しており、そこに新たに追加された達成目標も出てきている。荒木ら（2015）は養成校として実習指導者へ実習内容や指導方法を明確に示していく必要性を述べたうえで養成校と実習指導者での協働による実習プログラムの検討が重要であることを述べている<sup>2)</sup>。そのために

は、まずはソーシャルワーク実習において学生がどのような学びを得たのかについて実態を把握することが重要である。A 大学では1 回目のソーシャルワーク実習Ⅰを2023年7 月から8 月にかけて25日間の実習を終えた。そこで、筆者ら（2023）は、A 大学で1 回目のソーシャルワーク実習Ⅰを終えた57 名を対象に新カリキュラムで新たに追加された5 つの達成目標に関する自己評価と具体的な学びについて調査した<sup>3)</sup>。結果として「達成目標3：クライエント、グループ、地域住民等のアセスメントを実施し、ニーズを明確にすることができる」「達成目標4：地域アセスメントを実施し、地域の課題や問題解決に向けた目標を設定することができる」「達成目標5：各種計画の様式を使用して計画を作成・策定及び実施することができる」「達成目標6：各種

<sup>1</sup>九州看護福祉大学、<sup>2</sup>周南公立大学

計画の実施をモニタリングおよび評価することができる」「達成目標14：地域における分野横断的・業種横断的な社会資源について説明し、問題解決への活用や新たな開発を検討することができる」の5つすべての項目に関して実習前は実践できないと回答した者が多かったのに対して、実習後には実践できると回答した者が多かった。その背景として、25日間の実習では評価項目に沿った内容を体験し学びを得ているものの、体験できていない実習先は体験とは別の形で教育されていることがある。そのため、学生は学びとして捉えている。今回の新カリキュラムにおいて「地域」に関する学びも追加されているが、具体的な学びでは地域に関する内容が少ない項目もあった<sup>3)</sup>。ただし、ソーシャルワーク実習は始まったばかりであり、結果の蓄積が先行研究をみてもまだ少ないことから、一概に「地域」の学びが得られたとは言い難い。そこで、実習分野による実習プログラムの違いなども背景としてあることから、実習分野による実態をみていく必要性もある<sup>3)</sup>。

新カリキュラムにおける実習先の内容についてソーシャルワーク実習は地域の実態、社会福祉士の態度や姿勢、役割としての連携・協働の実際を具体的に学ぶことに加えて、社会福祉士・ソーシャルワーカーとしての自分を知る（自己覚知）の機会となる。そのことから新カリキュラムにおいて学生自身が実習後にどのような変化を感じたのかについて知ることは実習教育をする上で重要だといえる。荒木ら（2015）は、高齢者施設の実習指導者ヘインタビュー調査をし、実習指導者が抱える困難さやジレンマを明らかにしている<sup>2)</sup>。その具体的内容には、高齢者施設の業務において介護業務をすることがあるが他の専門職の理解という視点では学びになるが、ソーシャルワーク業務の学びという意味では課題が残るといったことである<sup>2)</sup>。さらに、そのようなジレンマを抱えながら、高齢者福祉分野の実習先は指導者要件を満たしている者が多いこと<sup>4)</sup>から高齢福祉分野の実習における実態を学生の自己評価や学生が実習を通して感じた変化からまずは見ていく必要がある。

そこで、今回、高齢者福祉分野の実習を経験した学生の達成目標25項目に対する自己評価と実習後に感じた自身の変化に関する自由記述をまとめ、それぞれの関連についてみていく。

## Ⅱ. 方法

### 1. 調査の対象と方法・調査期間

今回の調査となる実習はソーシャルワーク実習Ⅰである。今回の分析は筆者ら（2023）の際に分析した内容と荒木ら（2015）、高橋（2010）の先行研究の内容<sup>2) 3) 4)</sup>をもとに高齢者福祉分野を分析するため、A大学社会福祉学科に所属するソーシャルワーク実習Ⅰを経験してきた57名のうち高齢者分野に実習に行った12名を分析対象とした。ここでいう高齢者福祉分野の実習先とは、介護保険制度および老人福祉法に基づく事業所をいう。

本調査は、無記名による自記式質問調査（「ソーシャルワーク実習の学びに関するアンケート」）を用いて、基本属性（実習の種類、実習先の種別）、達成目標（表1）の自己評価は4件法で、実習を通して実習生が感じた変化については自由記述形式により回答を求めた。

表1 ソーシャルワーク実習における達成目標（学習内容・評価ガイドラインをもとに筆者作成）

(1) クライアント等と人間関係を形成するための基本的なコミュニケーションをとることができる
(2) クライアント等との援助関係を形成することができる
(3) クライアント、グループ、地域住民等のアセスメントを実施し、ニーズを明確にすることができる
(4) 地域アセスメントを実施し、地域の課題や問題解決に向けた目標を設定することができる
(5) 各種計画の様式を使用して計画を作成・策定及び実施することができる
(6) 各種計画の実施をモニタリングおよび評価することができる
(7) クライアントおよび多様な人々の権利擁護ならびにエンパワメントを含む実践を行い、評価することができる
(8) 実習施設・機関等の各種職種の機能と役割を説明することができる
(9) 実習施設・機関等と関係する社会資源の機能と役割を説明することができる
(10) 地域住民、関係者、関係機関等と連携・協働することができる
(11) 各種会議を企画・運営することができる
(12) 地域社会における実習施設・機関等の役割を説明することができる
(13) 地域住民や団体、施設、機関等に働きかける
(14) 地域における分野横断的・業種横断的な社会資源について説明し、問題解決への活用や新たな開発を検討することができる
(15) 実習施設・機関等の経営理念や戦略を分析に基づいて説明することができる
(16) 実習施設・機関等の法的根拠、財政、運営方法を説明することができる
(17) 実習施設・機関等における社会福祉士の倫理に基づいた実践及びジレンマの解決を適切に行うことができる
(18) 実習施設・機関等の規則等について説明することができる
以下の技術について目的、方法、留意点について説明することができる
(19) アウトリーチ
(20) ネットワーキング
(21) コーディネーション
(22) ネゴシエーション
(23) ファシリテーション
(24) プレゼンテーション
(25) ソーシャルアクション

調査は2023年8月31日にA大学の教室にて実施した。実施時には調査趣旨や協力依頼内容等が記載された文書を活用し、口頭で丁寧な説明を行なった。

調査票の配布及び回収方法については、教室にて学生へ質問紙を配布し、記入が終わったものを回収箱に投函してもらった。なお、質問紙調査の同意については調査票内に同意に関する設問がありその回答をもって同意したものとみなした。

## 2. 分析方法

表1の「達成目標(1)～(25)」の自己評価(4件法)については、実習前後において「実践できる」に有意な差が見られたのかを分析することを目的としていたため、符号検定<sup>5)</sup>を用いて分析を行った。分析ソフトは「IBM SPSS Statics Ver.29」である。「実習を通してあなた自身が感じた変化(自由記述)」の分析については高齢者福祉分野のソーシャルワーク実習教育における新たな発想を生み出す目的でKJ法<sup>6) 7)</sup>を用いた。

## 3. 倫理的配慮

調査対象者には、実施時には調査趣旨や協力依頼内容等が記載された文書を活用し、口頭により調査目的、内容、分析方法、結果の活用方法について丁寧な説明を行なった。その際①本調査は無記名であること、②研究協力への同意は任意であること、③協力途中で辞退することも可能であること、④研究協力の有無や回答内容が成績評価に一切影響がないこと、⑤自由記述については記入欄をすべて埋める必要がないこと、⑥研究協力に関して不明な点はいつでも説明可能であることを伝えた。調査票の配布及び回収方法については、教室にて学生へ質問紙を配布し、記入が終わったものを回収箱に投函してもらう流れで調査を実施した。なお、質問紙調査の同意については調査票内に同意に関する設問がありその回答をもって同意したものとみなした。また、分析において回答内容については個人が特定されないよう番号で取り扱った。本研究は九州看護福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理委員会の承認(倫理審査番号:05-018)を受け実施した。

## Ⅲ. 結果

### 1. 回答者の基本属性

回答者の基本属性について述べていく。実習先については、「介護老人福祉施設(特別養護老人ホーム)」が4名(33.3%)、「通所介護事業所」と「地域包括支援センター」が3名(25%)、「居宅介護支援事業所」と「介護老人保健施設」が1名(8.3%)であった。

## 2. 実習を通しての自己評価

表1の教育内容・評価ガイドラインに示す達成目標のどの項目が実習前より実習後の方が実施できると自己評価されたのかをみるため、それぞれ符号検定を実施した。結果については表2に示す。

表2 実習前後における達成目標に対する実践の可否についての事故評価

	実習前 (A)		実習後 (B)	比率の差
	実践できる	実践できない		
達成目標 (1)	6 (50.0%)	11 (91.7%)	+ 41.7%pt	
達成目標 (2)	3 (25.0%)	10 (83.3%)	+ 58.3%pt*	
達成目標 (3)	2 (16.7%)	11 (91.7%)	+ 75.0%pt**	
達成目標 (4)	2 (16.7%)	6 (50.0%)	+ 33.3%pt*	
達成目標 (5)	0 (0.0%)	8 (66.7%)	+ 66.7%pt**	
達成目標 (6)	2 (16.7%)	8 (66.7%)	+ 50.0%pt**	
達成目標 (7)	1 (8.3%)	7 (58.3%)	+ 50.0%pt*	
達成目標 (8)	6 (50.0%)	11 (91.7%)	+ 41.7%pt	
達成目標 (9)	5 (41.7%)	12 (100.0%)	+ 58.3%pt*	
達成目標 (10)	3 (25.0%)	8 (66.7%)	+ 41.7%pt	
達成目標 (11)	1 (8.3%)	4 (33.3%)	+ 25.0%pt*	
達成目標 (12)	4 (33.3%)	8 (66.7%)	+ 33.4%pt*	
達成目標 (13)	1 (8.3%)	4 (33.3%)	+ 25.0%pt*	
達成目標 (14)	1 (8.3%)	5 (41.7%)	+ 33.4%pt*	
達成目標 (15)	2 (16.7%)	5 (41.7%)	+ 25.0%pt*	
達成目標 (16)	3 (25.0%)	7 (58.3%)	+ 33.3%pt*	
達成目標 (17)	1 (8.3%)	5 (41.7%)	+ 33.4%pt*	
達成目標 (18)	3 (25.0%)	6 (50.0%)	+ 25.0%pt*	
達成目標 (19)	3 (25.0%)	7 (58.3%)	+ 33.3%pt*	
達成目標 (20)	1 (8.3%)	7 (58.3%)	+ 50.0%pt**	
達成目標 (21)	2 (16.7%)	7 (58.3%)	+ 41.6%pt*	
達成目標 (22)	1 (8.3%)	5 (41.7%)	+ 33.4%pt*	
達成目標 (23)	1 (8.3%)	5 (41.7%)	+ 33.4%pt*	
達成目標 (24)	1 (8.3%)	7 (58.3%)	+ 50.0%pt*	
達成目標 (25)	2 (16.7%)	5 (41.7%)	+ 25.0%pt*	

\* : p<0.05      \*\* : p<0.01

結果として達成目標(1)と(8)と(10)以外の22項目において有意な差がみられた。

その中でも、達成目標の(3)(4)(12)(13)(14)に関しては地域に関する内容であったがその目標に対して実践できるという自己評価が得られたことはここでの1つの特徴といえる。また、(5)や(19)(20)(21)(22)(23)(24)(25)に関してもすべてのソーシャルワーク技術の項目に関しても実践できるという自己評価が得られていることからこれも特徴の1つといえる。

### 3. 実習終了後に実習生が感じた変化

実習を通して実習生が感じた変化について自由記述の全文の中から、「感じられた変化」について述べられた部分を抽出した。その後、適切に圧縮化して小カテゴリとしてラベル化し、その後、中カテゴリ、大カテゴリとグループ編成をした。その際、文



表3 実習後に感じた変化

コミュニケーション技術	コミュニケーション技術の習得	初対面でのコミュニケーションのコツをつかんだ
		専門職との関係形成ができた
		専門性を生かしたコミュニケーション技術が身についた
		良好な関係形成のためのコミュニケーションが身についた
		高齢者とのコミュニケーションが身についた
		信頼関係構築のためのコミュニケーション技術が身についた
	コミュニケーション技術の不十分さ	コミュニケーション技術の不十分さを実感
		コミュニケーション時に注意する点の気づき
		コミュニケーションにおいて想定外の課題を発見
	コミュニケーションに対する自信	コミュニケーションに対する達成感
ソーシャルワーカーの実態把握	ソーシャルワーカーの業務把握	社会福祉士の業務等について経験を通して把握
	ソーシャルワーカーの多職種連携	社会福祉士の現場の実際をより理解
ソーシャルワークの理解	ソーシャルワークの視点	さまざまな職種との連携による支援の大切さの理解
	ソーシャルワークの知識の習得	ソーシャルワークの視点を意識
社会資源活用理解	社会資源活用大切さの理解	ソーシャルワークに必要な知識の習得
	社会資源活用方法の理解	社会資源活用大切さについてより理解できた
		社会資源に対する視野が拡大した
ネットワーク理解	ネットワーク形成した支援	社会資源の活用方法について理解できた
支援計画作成に対する意識	支援計画作成の際の記入に対する意識	ネットワークを形成した支援のあり方を深めた
社会福祉士としての適性把握	就職先としての適性	ソーシャルワーク展開における計画作成の際の意識
利用者主体の支援	利用者目線の支援	就職先としての考えが現場を見て深められた
考え方	考え方の成長	職員目線から利用者目線への支援
	考え込むことへの気づき	疑問を持つことを習得
事前学習の大切さ	事前学習不足	考え込んでしまうことへの気づき
		事前学習不足の気づき
実践力	実践力不足	知識不足の気づき
	実践力の習得	実践力不足の気づき
		自分で考え行動することが身についた

脈や記述者の意図を歪めない範囲で各カテゴリを整えた。

本文中の【 】は大カテゴリ、〔 〕は中カテゴリ、「 」は小カテゴリ、“ ”は具体的な内容として示す。以下、KJ法による分類結果を表3に示す。

①【コミュニケーション技術】この大カテゴリは、〔コミュニケーション技術の習得〕〔コミュニケーション技術の不十分さ〕〔コミュニケーションに対する自信〕の3つの中カテゴリから統合された。

〔コミュニケーション技術の習得〕には、「初対面でのコミュニケーションのコツをつかんだ」「専門職との関係形成ができた」「専門性を生かしたコミュニケーション技術が身についた」「良好な関係形成のためのコミュニケーションが身についた」「高齢者とのコミュニケーションが身についた」「信頼関係構築のためのコミュニケーション技術が身についた」の6つが含まれていた。「初対面でのコミュニケーションのコツをつかんだ」には「初対面の方と話すことが苦手であったが、指導者から「身近なことや天気のこと話しかけるといいよ」と言われ話しかけられるようになった」があった。「専門職との関係形成ができた」には「指導者、職員、利用者との関係を良好に保てた」があった。「専門性を生かしたコミュニケーション技術が身についた」には「初対面の人と話すとき、人見知りする性格だったけど、実習を通して専門性を学ぶことで利

用者の人と話すときに会話が弾むようになった」があった。「良好な関係形成のためのコミュニケーションが身についた」には「会話が続かないことが多々あったが、積極的に会話をすることで慣れていき利用者とも良い関係性で終わる事ができた」があった。「高齢者とのコミュニケーションが身についた」には「高齢者とコミュニケーションをとる力が身についた」があった。「信頼関係構築のためのコミュニケーション技術が身についた」には「信頼関係を構築していくうえでのコミュニケーションスキルを身につけられた」があった。

〔コミュニケーション技術の不十分さ〕には「コミュニケーション技術の不十分さを実感」「コミュニケーション時に注意する点の気づき」「コミュニケーションにおいて想定外の課題を発見」の3つが含まれていた。「コミュニケーション技術の不十分さを実感」には「クライアントとの会話技術が挙げられると自分で感じたためこれからもっとコミュニケーション力を身につけていきたい」があった。「コミュニケーション時に注意する点の気づき」には「対象者に何か質問したいときに自分の中で勝手に利用者の考えを決めつけて質問できなかったことが悪かった」があった。「コミュニケーションにおいて想定外の課題を発見」には、「利用者とのコミュニケーションには自信を持っていたが、アセスメントやモニタリングになると緊張してうまく会話

が進められない”があった。〔コミュニケーションに対する自信〕には「利用者の言葉によってコミュニケーションへの自信がついた」が含まれていた。〔コミュニケーションに対する達成感〕には“利用者とのコミュニケーションをとるなかで「話ができて嬉しい」などの言葉や感謝の言葉をいただいたことが嬉しかった”があった。

## ②【ソーシャルワーカーの実態把握】

この大カテゴリは、〔ソーシャルワーカーの業務把握〕〔ソーシャルワーカーの多職種連携〕の2つの中カテゴリから統合された。〔ソーシャルワーカーの業務把握〕には「社会福祉士の業務等について経験を通して把握」「社会福祉士の現場の実際をより理解」の2つが含まれていた。〔社会福祉士の業務等について経験を通して把握〕には“実習に行くことで社会福祉士の業務内容や働き方、大変さややりがいなどを知ることができた”があった。〔社会福祉士の現場の実際をより理解〕には“実際に現場での様子を見て利用者の声を聞くことで理解も深まり社会福祉士としてのビジョンもより明確なものとなった”があった。

〔ソーシャルワーカーの多職種連携〕には「さまざまな職種との連携による支援の大切さの理解」が含まれていた。〔さまざまな職種との連携による支援の大切さの理解〕には“一人で抱え込んで何もできなくなるよりも人に手を貸してもらい少しずつでも解決に進むことが大切だと考えるようになった”があった。

## ③【ソーシャルワークの理解】

この大カテゴリは、〔ソーシャルワークの視点〕〔ソーシャルワークの知識の習得〕の2つの中カテゴリから統合された。〔ソーシャルワークの視点〕には「ソーシャルワークの視点を深められた」が含まれていた。〔ソーシャルワークの視点を意識〕には“実習を通して社会福祉や相談援助の視点を意識できるようになった”があった。

〔ソーシャルワークの知識の習得〕には「ソーシャルワークに必要な知識の習得」が含まれていた。〔ソーシャルワークに必要な知識の習得〕には“今回の5週間の実習を通して様々な制度や相談援助について学ぶことができた”があった。

## ④【社会資源活用の理解】

この大カテゴリは、〔社会資源活用の大切さの理

解〕〔社会資源活用の方法の理解〕の2つの中カテゴリから統合された。〔社会資源活用の大切さの理解〕には「社会資源活用の大切さについてより理解できた」が含まれていた。〔社会資源活用の大切さについてより理解できた〕には“個別支援計画を作成する際に社会資源等についてあまり書けていなかった”があった。

〔社会資源活用の方法の理解〕には「社会資源に対する視野が拡大した」「社会資源の活用方法について理解できた」が含まれていた。〔社会資源に対する視野が拡大した〕には“社会資源の見方が変わり今までの自分が関わってきた団体や学校など地域の理解を深める機会ができた”があった。〔社会資源の活用方法について理解できた〕には“ストレングスを見出し、弱点は社会資源で補うと考えてもいいのだと学んだ”があった。

## ⑤【ネットワークの理解】

この大カテゴリは〔ネットワークを形成した支援〕の中カテゴリから統合された。〔ネットワークを形成した支援〕には「ネットワークを形成した支援のあり方を深めた」が含まれていた。〔ネットワークを形成した支援のあり方を深めた〕には“ソーシャルワークでもたくさんのネットワークを形成し、ニーズを抱えた人を支援していくことが大切であると理解した”があった。

## ⑥【支援計画に対する意識】

この大カテゴリは、〔支援計画作成の際の記入に対する意識〕の中カテゴリから統合された。〔支援計画作成の際の記入方法〕には「ソーシャルワーク展開における計画作成の際の意識」が含まれていた。〔ソーシャルワーク展開における計画作成の際の意識〕には“具体性が欠けており個別支援計画等うまくまとめることができなかったため文章力を身につけるよう意識した”があった。

## ⑦【社会福祉士としての適性把握】

この大カテゴリは〔就職先としての適性〕の中カテゴリから統合された。〔就職先としての適性〕には「就職先としての考えが現場を見て深められた」が含まれていた。〔就職先としての考えが現場を見て深められた〕には“今後の就職を考えていくうえで自分の適性などを考えることができた”があった。

## ⑧【利用者主体の支援】

この大カテゴリは〔利用者目線の支援〕の中カテ

ゴリから統合された。〔利用者目線の支援〕には「職員目線から利用者目線への支援」が含まれていた。「職員目線から利用者目線への支援」には「職員目線の支援計画になってしまった。多様な視点をもって利用者のことを考える必要があることを改めて実感した」があった。

#### ⑨【考え方】

この大カテゴリは、〔疑問の持ち方〕〔考え込むことへの気づき〕の2つの中カテゴリから統合された。〔考え方の成長〕には「疑問を持つことを習得」が含まれていた。「疑問を持つことを習得」には「疑問を持つことを心がけられるようになった」があった。

〔考え込むことへの気づき〕には「考え込んでしまうことへの気づき」が含まれていた。「考え込んでしまうことへの気づき」には「考え込んでしまう癖が分かった」があった。

#### ⑩【事前学習の大切さ】

この大カテゴリは、〔事前学習不足〕の中カテゴリから統合された。〔事前学習不足〕には「事前学習不足の気づき」「知識不足の気づき」が含まれていた。「事前学習不足の気づき」には「専門用語、介護技術についての勉強をもう少ししておくべきだった」があった。「知識不足の気づき」には「知識が全く足りなかった」があった。

#### ⑪【実践力】

この大カテゴリは、〔実践力不足〕〔実践力の習得〕の2つの中カテゴリから統合された。〔実践力不足〕には「実践力不足の気づき」が含まれていた。「実践力不足の気づき」には「学んだことを実践的に行うことが難しい」があった。

〔実践力の習得〕には「自分で考え行動することが身についた」が含まれていた。「自分で考え行動することが身についた」には「自分で考えて行動できた」があった。

### 4. 図解化に基づく文章化

以上の①から⑪を図解化したものが図1、図2のとおりである。

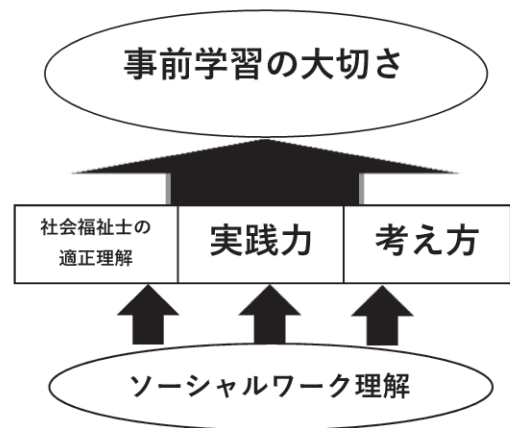


図1 学生自身が感じた変化について（図解化1）

結論として、図1のように高齢者福祉分野の実習を経験した学生は実習を通して「ソーシャルワークの理解」をするために「考え方」をもとに「実践力」が試され、さらには自分自身の「社会福祉士の適性把握」を通して「事前学習の大切さ」に気付くことができたという変化を実感していることが窺えた。具体的には学生は事前学習をしたうえで実習に臨んだが、実際の現場を経験することで学生自身が想定した以上の学習を得ることができ、そこから改めてさらなる事前学習の必要性を感じたものであったことに気づかされたということである。【ソーシャルワークの理解】をさらに詳細にしたものが図2である。

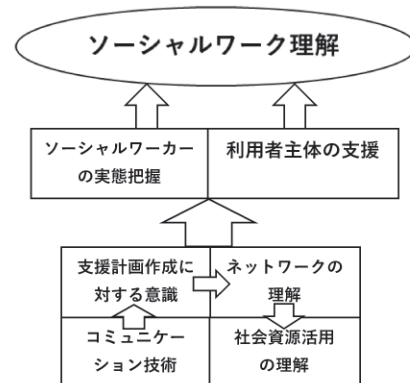


図2 学生自身が感じた変化について（図解化2）

高齢者福祉分野の実習を経験した学生が感じた変化として、まず今回の実習ではソーシャルワークの展開過程について目標に掲げて実習に臨んでいる。その経験から展開過程の1つである【支援計画作成に対する意識】が重要であることをより理解した。それは【利用者主体の支援】を実現するために重要



であり、そのためには高齢者との信頼関係構築のためのベースとなる【コミュニケーション技術】が重要であることを実習経験から身につけることができた、若しくはうまくいかなかったといった気づきを得たと感じた。また、ニーズを踏まえて実践する際には【社会資源の活用】や高齢者であれば人やサービスとのつながりといった【ネットワークの理解】も重要であることを理解した。そして、そのことが相談援助などといった【ソーシャルワークの理解】といった実感につながっている。

また、実習に行くことは実際の現場を経験できることから【ソーシャルワーカーの実態把握】ができる。さらに、先に挙げた【支援計画作成に対する意識】【コミュニケーション技術】等も含めて理解が深まると【社会福祉士の適性理解】といった職業人としての適性を見極めることもできた。よって、社会福祉士としての適性に対する気づきも得ることができたといえる。

それらのことから最終的には【事前学習の大切さ】を改めて理解した実習となっていることがいえる。

したがって、今回の高齢者福祉分野を経験した学生が感じた変化としては事前学習をしたうえで臨んだ実習だったが、実際の現場を経験することで学生自身が想定した以上の学習を得ることができ、そこから改めてさらなる事前学習の必要性を感じたものであったことに気づかされたということがいえる。

#### Ⅳ. 自己評価と変化についての関連と考察

今回、高齢者福祉分野の実習を25日間経験してきた学生のみを対象に調査・分析した。実習を通しての自己評価については達成目標「(2) クライアント等との援助関係を形成することができる」「(3) クライアント、グループ、地域住民等のアセスメントを実施し、ニーズを明確にすることができる」「(4) 地域アセスメントを実施し、地域の課題や問題解決に向けた目標を設定することができる」「(5) 各種計画の様式を使用して計画を作成・策定及び実施することができる」「(6) 各種計画の実施をモニタリングおよび評価することができる」「(7) クライアントおよび多様な人々の権利擁護ならびにエンパワメントを含む実践を行い、評価することができる」

「(9) 実習施設・機関等と関係する社会資源の機能と役割を説明することができる」「(11) 各種会議を企画・運営することができる」「(12) 地域社会における実習施設・機関等の役割を説明することができる」「(13) 地域住民や団体、施設、機関等に働きかける」「(14) 地域における分野横断的・業種横断的な社会資源について説明し、問題解決への活用や新たな開発を検討することができる」「(15) 実習施設・機関等の経営理念や戦略を分析に基づいて説明することができる」「(16) 実習施設・機関等の法的根拠、財政、運営方法を説明することができる」「(17) 実習施設・機関等における社会福祉士の倫理に基づいた実践及びジレンマの解決を適切に行うことができる」「(18) 実習施設・機関等の規則等について説明することができる」「(19) アウトリーチ」「(20) ネットワーキング」「(21) コーディネーション」「(22) ネゴシエーション」「(23) ファシリテーション」「(24) プレゼンテーション」「(25) ソーシャルアクション」について有意差がみられたことから高齢者福祉分野において25項目のうち22項目で学生が実習前よりも実習後に実践できると自己評価している者が増えたことが明らかとなった。実習先ごとに実施環境が違うこと<sup>8)</sup>から25日間という比較的長期間の実習において学生が達成目標の全てを「実践できる」となることには限界があるかもしれない。高齢者福祉分野では特別養護老人ホーム、介護老人保健施設といった老人福祉法、介護保険法に基づく入所系サービスに実習に行くことがある。その場合、高橋（2010）も指摘しているように施設内に多数の専門職が配置されている場であること<sup>4)</sup>から各職種の機能と役割は理解しやすい。また、施設内だけではなく同法人内の他事業所、例えば通所系や訪問系の場における実習もある。そのことから施設内や在宅でいえることはクライアントとのかかわりをもつ機会が多くクライアントに関する理解を深めやすい。さらに、地域包括支援センター、居宅介護支援事業所といった事業所とも密に連携をとっていることから地域を軸とした取り組みも多くネットワーク、コーディネート、ネゴシエーション、ファシリテーション、プレゼンテーション等といったソーシャルワークの技術を学ぶ機会がある。そのことから高齢者福祉分野の実習における学びの1つの特徴として捉えることができる。

また、学生が気付いた変化の中でできたことのみならず【事前学習の大切さ】の中に事前学習や知識が不足していた等のできなかったことに気づいたことも変化として挙がっていた。これは、ソーシャルワーク実習における実習指導の目的にあるように「実習を通して、自らの知識不足や理解の不十分さなどに気づくことで、事後学習の課題やその後の研究課題等の設定につながる<sup>1)</sup>」ことから1回目の実習としては重要な気づきといえる。このことを実習事後指導、さらには2回目の実習につなげることでより新カリキュラムの目的の1つである2回の実習の連続性を成すことになる。さらに、この不十分さなどへの気づきについて、学生は実習前に学内のソーシャルワーク実習指導や実習指導者との連絡協議会を通して実習指導者、指導教員との3者間でのやりとりにより事前学習を進めていることから学生自身はソーシャルワークに関する理解が深まったことによりさらなる深い学習に向けて不十分さを感じている可能性も考えられる。

次に、達成目標と学生が感じた変化の関連についてみていくと【コミュニケーション技術】については「(2) クライアント等との援助関係を形成することができる」に直接関連する内容である。また、間接的ではあるが「(3) クライアント、グループ、地域住民等のアセスメントを実施し、ニーズを明確にすることができる」に関連する内容でもある。

他にも【支援計画作成に対する意識】については「(4) 地域アセスメントを実施し、地域の課題や問題解決に向けた目標を設定することができる」、「(5) 各種計画の様式を使用して計画を作成・策定及び実施することができる」と実施の部分を除いた結果ではあるが、関連している。また、「(6) 各種計画の実施をモニタリングおよび評価することができる」を経験して計画作成についてより理解が深まったことも考えられることからこの部分も関連しているかもしれない。

【利用者主体の支援】については「(7) クライアントおよび多様な人々の権利擁護ならびにエンパワメントを含む実践を行い、評価することができる」に関連している内容といえる。

【社会資源活用の理解】については「(9) 実習施設・機関等と関係する社会資源の機能と役割を説明することができる」と直接関連する内容である。

【ソーシャルワーカーの実態把握】については主に社会福祉士の業務内容の記述等が挙がっていた。そのなかでも〔ソーシャルワーカーの業務把握〕は達成目標ではないが、ソーシャルワーク実習における実習指導の目的にある「実習とは単なる現地での体験学習とは異なり、事前学習・配属実習・事後学習を通してソーシャルワークの業務や実践に必要な知識・技術の学びを深めるということを理解する<sup>1)</sup>」ことについてもつながっている内容といえる。

【ネットワークの理解】については「(20) ネットワーキング」と直接関連する内容である。

【ソーシャルワークの理解】については達成目標ではなく、ソーシャルワーク実習における実習指導の目的にある「実習とは単なる現地での体験学習とは異なり、事前学習・配属実習・事後学習を通してソーシャルワークの業務や実践に必要な知識・技術の学びを深めるということを理解する<sup>1)</sup>」とあるようにその部分と関連している内容といえる。

【社会福祉士の適性把握】についても先ほどと同様に達成目標ではなく、ソーシャルワーク実習における実習指導の目的に「社会福祉士・ソーシャルワーカーになるための学びとして、なぜ実習が重要なのかを理解するとともに、実習と実習指導とのつながりについても理解する<sup>1)</sup>」とあるようにその部分と関連していることが窺える。

【考え方】【実践力】については達成目標と関連というよりはソーシャルワークの「実習は社会福祉・ソーシャルワークの理論と実践とを統合的に学ぶ機会となること<sup>1)</sup>」から目標を達成するために取り組んだ結果として得られたものとしてある。

【事前学習の大切さ】に関しても達成目標と関連というよりも各目標を達成できるための補完的なものとして捉えることができる。また、この部分は実習に行って気づいたこととして挙がっているものの実習前に備えておく必要のあるものでもある。

以上のことから、有意差がみられた達成目標との関連をみると12項目のうち10項目は自己評価もしくはソーシャルワーク実習のガイドラインで示している実習の意義や実習の目的と関連した内容に関する変化を感じていたことがわかる。しかし、「(19) アウトリーチ」「(21) コーディネーション」「(22) ネゴシエーション」「(23) ファシリテーション」「(24) プレゼンテーション」「(25) ソーシャルアクション」



ン」については実習前よりも実習後に「実践できる」と回答した者が増えたが、学生が感じた変化として直接関連している内容が挙がっていなかったことが明らかとなった。このことはソーシャルワークに求められる実践的理解の内容である。巻(2022)が2021年度新カリキュラム導入前に行った調査によると新カリキュラム実習において実施環境によるものとして「コーディネート」「プレゼンテーション」「ネゴシエーション」「ソーシャルアクション」があることから<sup>8)</sup> 実習先としても提供方法に苦慮されている項目である。さらに、それ以外の技術の実践的理解に挙がっている「ファシリテーション」についても検討できるとしているものの場の提供や環境整備が重要なものであるうえに「アウトリーチ」も実現できるのか疑問という結果も出されている<sup>8)</sup>。そのため、黒木ら(2023)の調査で明らかになったように実習において体験ではなく座学といった違う形で臨機応変に対応してもらったこと<sup>3)</sup>により理解し実践できると思われることから自己評価をしたが、体験をしていないことからまだ変化としては書けなかった可能性がある。

## V. 結語

今回、高齢者福祉分野の実習に限定してソーシャルワーク実習Ⅰでの自己評価と実習後に自身が感じた変化についてみてみた。まずは、達成目標の25項目のうち22項目は有意差がみられたこと、そして、「地域」に関する自己評価とソーシャルワーク技術の実践的理解についても自己評価について実習前より実習後のほうが実践できると回答した者が多いことも明らかになった。したがって、先行研究と比べて「地域」に関する学びを得る機会が多く、自己評価につながっているということ、さらにはソーシャルワーク業務に対する学びを得ていることが窺える結果となった。そして、最終的な結論としては事前学習の大切さに対する気づきを得ることにつながっていることから本調査結果を今後のソーシャルワーク実習Ⅱへ活用する必要性もみえてきた。

今回、新カリキュラムのソーシャルワーク実習自体が養成校で始まったばかりであり、今回、初期段

階の実習ということで対象者が12名であったことから、本研究結果を断定するには限界があるといえる。よって、今後は高齢者福祉分野の学びを蓄積や事前学習内容の分析、さらには他分野も併せてみていくことで実習プログラムのあり方について検討できると思われる。

## VI. 謝辞

今回、調査に協力してくれたA大学の学生に心より感謝申し上げます。

## VII. 文献

- 1) 一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟. ソーシャルワーク実習指導・実習のための教育ガイドライン(2021年8月改訂版). 2021: 1-61.
- 2) 荒木剛・山本佳代子・通山久仁子・木村美穂子・小田寛子. 相談援助実習における実習プログラムを巡る現状と課題—実習指導者へのグループインタビューを中心とした検討—. 西南女学院大学紀要. 2015; 19: 92-94.
- 3) 黒木真吾・田島望・竹下徹・牛島豊広. 新カリキュラムにおけるソーシャルワーク実習の学びと今後のあり方—A大学学生の自己評価から—. 生駒社会文化研究. 2023; 3: 17-27.
- 4) 高橋昌子. 新カリキュラムにおける社会福祉士養成教育—高齢者福祉分野での相談援助実習対応を通して—. 神戸親和女子大学教育研究センター紀要. 2010: 6. 21-27.
- 5) 篠原弘章. ノンパラメトリック法. ナカニシヤ出版. 1992. 1-269.
- 6) 川喜田二郎. 発想法. 中央公論社. 1967. 1-220.
- 7) 川喜田二郎. 続・発想法. 中央公論社. 1970. 1-316.
- 8) 巻康弘. ソーシャルワーク実習(社福)の実施可能性と課題—行動目標に対する実習指導者調査より—. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌. 2022; 18(1): 137-148.

[Original Article]

**After completing the new curriculum Social Work Practical I  
Relationship between changes perceived by students and self-evaluation:  
From self-evaluations of University A students with experience in elderly  
welfare**

**Shingo Kuroki<sup>1,\*</sup>, Nozomi Tashima<sup>1,\*</sup>, Toru Takeshita<sup>2,\*</sup> and Toyohiro Ushijima<sup>2,\*</sup>**

<sup>1</sup> *Kyushu University of Nursing and Welfare*

<sup>2</sup> *Shu-nan University*

**[Abstract]**

In 2021, a new curriculum of social work training was implemented. Results obtained during the first training showed a need for analysis by training type. Therefore, we analyzed a survey on social work practice with 12 University A students who had experienced practical training in elderly welfare. Analysis was based on students' self-evaluations (4-case method) and the changes (free description) they felt through practical training. As for self-evaluation, analysis of the sign test showed that 22 of the 25 achievement targets in welfare for the elderly were more likely to be practiced after training than before it. Results demonstrate the many opportunities to learn about "the community" and social work in the new curriculum's practical training, which leads to self-evaluation. Additionally, when students' changes felt through the training were categorized by the KJ method, 11 were listed. This led to awareness of prior learning's importance; thus, using this survey's results for the future Social Work Practice II has become necessary. Next, we must analyze the accumulation of learning about the elderly, the content of pre-learning, and other fields' situations in practical training.

**Keywords:** *Social work training, elderly welfare, social worker training, practical education, new curriculum*

---

\* Corresponding author.